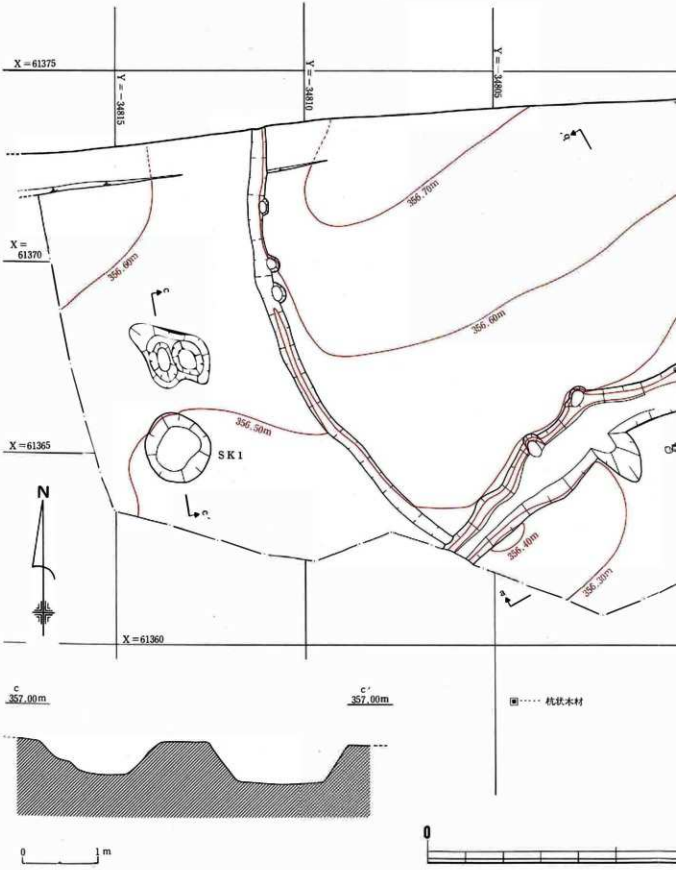


図29　C区遺構検出状況実測図（Scale＝1：100

微高地上の遺構で唯一居住形態を示すものに掘立柱建物跡がある。柱の痕跡を明瞭に残すものは１号柱穴～３号柱穴の３基のみである。１号柱穴は直径52cmの円形を呈し、中心よりやや北東寄りに直径18cmの柱の痕跡が位置している。２号柱穴は１号柱穴より北西方向に3.1mの間隔をもち位置している。直径19cmの柱の痕跡は北西で、埋土からは土器破片が出土した。１号柱穴より北東に5.6mの位置に３号柱穴がある。柱の痕跡は中央で直径23cmを測る。調査区内で確認し得る規模は１間×１間であるが、調査区外や、他土坑との関連でさらに大規模になる可能性は否定できない。

掘立柱建物跡検出状況（北東から）

掘立柱建物跡検出状況（南東から）

掘立柱建物跡の柱穴列のほぼ中央に、長軸60cm・短軸54cm・深さ40cmを測る３号土坑がある。柱穴土坑とは異なり柱の痕跡は検出されず、埋土下層から底面までの間に土師器群一括出土をみたことからも土器埋納土坑と考えられる。出土した土師器の器種構成は、高杯杯部２、高杯脚柱部（筒形）２、高杯脚部（裾広形）１、小形丸底土器（壺形）１、ミニチュア土器１で、図示できなかったが甕胴部破片等がある。とくに土師器直口壺はほぼ完形で３個体出土している。出土量は少ないが、良好な一括資料としてとらえることができる。

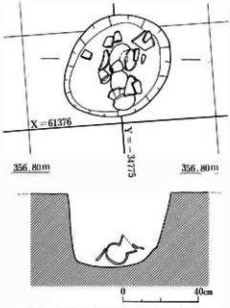


図27　３号土坑遺物出土状況実測図
(Scale＝１：20)

３号土坑遺物検出状況（北東から）

(4) C区の遺構

調査区の西側に位置する。当区における微高地は、上段・中段・下段と3段階に分かれそれぞれ落ち込みないしは溝で区画している。微高地上段は標高356.89mを最高点とし、東側のB区との境界から南と西双方に若干傾斜している。A・B区において落ち込みラインが北東方向であったのに対し、緩やかに弧を描きながら北西へ向きを変し、隅丸方形状を呈している。微高地中段は標高356.60m付近で、西側の下段とは幅40cm・深さ5～6cmを測る溝で区画され、南の低地部分とは幅50～80cm・深さ30cmを測る溝で区画されている。微高地下段は標高356.50m付近で、上段との差は約30cmである。A区ほどの遺物多量出土はみられなかったが、土器片・石材・木材等の包含層が、3層にわたり堆積している。

微高地上段より検出した遺構は小穴5基のみである。いずれも直径20～26cm、深さ20～25cmの規模である。3基が直線上に並ぶが、規則性については明確にし得なかった。南落ち込みの肩部に土坑1基検出した。性格は不明であるが、B区の3基と同じ性格のものと類推される。下段より比較的規模の大きな土坑2基を検出した。1号土坑は直径1.68m・深さ60cmを測る円形を呈し、木材片・石材等を埋土下層中に含んでいる。さらに北側に深

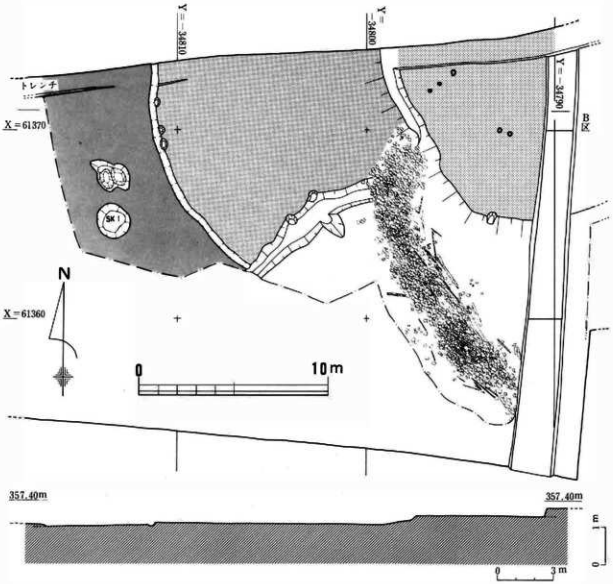


図28　C区遺構全体図（Scale＝1：200、断面標高のみ1：100）

さ40cmの不整形土坑を検出した。あたかも2基の土坑が接しているようであるが、遺物は出土しなかった。中段と低地部分を区画する溝は、集石遺構より発し南西方向に延びて微高地と低地部を区画しているものと思われる。微高地側の肩部より深さ25cm程度の2基の小土坑を検出したが、性格は不明である。中段と下段を区画する溝は、上述の溝より発しさらに北方へ延びている。同様に中段側に深さ10cm規模の小土坑3基を検出したが性格は不明である。

微高地上段と中断の境界部から南東方向に、全長16m・幅約2.4m規模の帯状の集石遺構を検出した。上段より南西方向へ発し、中段と低地を区画する溝の発する地点で南東方向に向きをかえている。B区との境界畦の中に向かっているが、B区のトレンチからは検出されないためさらに連続するものではない。石材は転がりにより角のとれた人頭大の山石が主となり、葺石状に密集している。現状での集石の高さは2～3段積み上げたものであるが、低地側に崩落の状況が看取される。復元すれば、4～5段の高さがあったと思われる。この集石の両側から木材片が検出された。1点のみ集石上に横たわっているが、他は集石の両側一面に沿うように出土している。集石の微高地側に大形の木材片が多く、板状に加工されている。さらに杭状木材が、微高地側に2本、集石の中に1本地面に刺さった状態で検出された。大形の板材が杭状木材に接しており、あたかも押えているかのようである。集石の低地側には自然木の枝部分が多く、また炭化材も1本検出されている。植物種子4片の出土をみたが、土器等は極めて少ない。遺構の性格として、微高地上段の隅角を氾濫時の乱流から保護する防護堤的な施設の可能性が考えられる。また低湿地帯への導入路的な役割も想定できる。

C区全景（西から）

C区検出状況（下段から）

C区検出状況（上段から）

全景（南西から）

全景（南から）

近景（南西から）

近景（北西から）

木材・土器出土状況（北東から）

杭状木材検出状況（南東から）

C区集石遺構検出状況

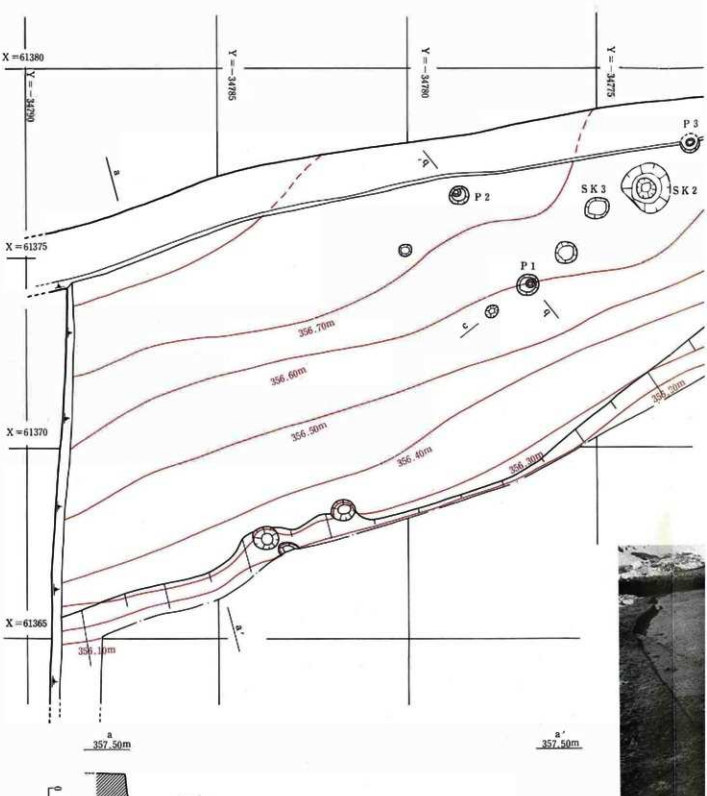


図26　B区遺構検出状況実測図（Scale＝1：100、a

2 遺　物

(1) 土 師 器

実測するにあたっては、口縁部から底部まで一部分でも連続して遺存するものは全て図示し、口縁部のみ残存するものは明確に半径のわかるもの、底部のみの場合は胴下半まで残存部分があるもの、等を原則として図に表わした。

なお、実測図掲載以外の土器破片数量に関しては、分類毎に識別できた範囲内で、個体数を計数して［　］内に表示した。計数が不確実と思われるものについては、識別できた破片の総重量を表示した。また、補足として、破片総重量から割り出される個体数を、1/4破片の重さを基礎に試算したが、これはあくまでも仮定であり、重量を個体数に換算した一つの目安とお考えいただきたい。

壺〔図33・34　1～26〕

口縁部の形態から2類に大別した。

Ⅰ類有段口縁壺（1～15）は、a－口縁部が強く外反するもの（1・2・7・8）、b－口縁部の段に凸帯を有するもの（3～6）、c－受口状になるもの（10～13）、d－口縁部が外反肥厚するもの（14·15）とがある。2は口縁端部で強くそり返り真横になるのを特徴とする。4は口縁部外面はヨコナデ後ヘラミガキが施され、胴部は縦方向の（以下「縦」と略）ハケメ後ヘラミガキ、内面は横方向の（以下「横」と略）ハケメが施される。13は赤褐色を呈し、口縁部には縦ヘラミガキ、胴部は縦ハケメが施され、内面はヨコナデが施される。14は灰褐色を呈し焼成も非常に堅緻でハケメ後ヘラミガキが丁寧に施される。

Ⅱ類直口縁壺は、a－口縁部がやや強く外反するもの（16～18）、b－直線的に外反するもの（19～22）があり、器面調整はハケメ後ヘラミガキが施される。18の内面は縦または横ハケメが不規則に施されている。19はヨコナデ後縦ヘラミガキが丁寧になされており薄手小形で外面はスス黒くなっている。［Ⅰ・Ⅱ類口縁部破片　重量4.0kg］

甕〔図34～36　27～77〕

Ⅰ類小形甕（27～33）、Ⅱ類中形甕（34～71）、Ⅲ類大形厚手甕（72・73）に大別出来、また、Ⅱ類においてはさらに細別が可能である。

Ⅰ類28は胴部に縦ハケメが施され、底部付近にはケズリがみられ、頸部内面には指頭痕が残されている。33は胴部にヘラ状工具による縦の沈線文が施される。［口縁部破片　重量2.9kg］

Ⅱ類は、a－口縁部が緩く外反し、口端部に面があるもの（34～37·42～43）で、胴肩部に僅かに横ハケメが見られ、球形の体部を呈す。b－口縁部がくの字に強く外反するもの（38～41）、c－口縁部が肥厚外反し、胴部はいびつになるものもある（44～46）。d－口縁部がやや長めに強く外反し、口端部に面があるもの（47～48）と薄くなるもの（49～50）がある。いずれもハケメ調整が施され、50は口縁部と胴部は横ハケメで頸部に縦ハケメが施されるものである。e－口縁部が内弯し、口唇が内側に折り返すように面をつくっているもの（63）は白褐色を呈し、胎土に黒または赤褐色のゴマのようなツブツブが混入し、布留式新相の影響を受けた北陸系の様相を呈する。f－口縁部が内弯し短いもの（64）、g－小形の粗製土器で口縁部が非常に短く外反するもの（65）、h－胴部が卵形になり、口縁部がやや長めにくの字に外反するもの（66～67·69～70）と緩く外反するもの（68）とあって、71

はその胴部片である。底部は尖底気味になる。51～62はａ～ｄの胴部及び底部で球形あるいは底部にきてすぼまるやや扁平球的な形態を呈し、底部は平底が主体で、ケズりにより底部を形作るものもある(55･57･59～61)。［口縁部破片　重量24.4kg÷100ｇ＝244個体分］

Ⅲ類の大形厚手を呈するものは出土量は少ない。72は口縁部片で口径28cm、頸部径23.2cmを計る。器面は荒れていて、調整痕は不明瞭であるが横ハケメが施されていたものと思われる。73は頸部径17cm、胴部最大径約43.6cmを計り、器高はおよそ70cm近くなると推定されるが、有段口縁をもつ壺かもしれない。［底部　９個体］

台付甕〔図36　75～78〕

いずれも底部のみの出土で、小形（75～76）と中形（77～78）があり、77はハケメが顕著に遺存している。77･78は台付甕というより他の特殊な器種かもしれない。

高杯〔図37～41　79～225〕

すべて破損して出土し、何個体かは復元して全容が明らかになったものもあるが、多くは杯部と脚部に分断されているので、実測する場合、原則的に杯部なら口縁部から杯底部まで接合できたもの、脚部ならば頸部から裾部まで接合できたものを行ない、杯部だけあるいは脚部だけというものの方が圧倒的に多いので形態的に分類するのも困難ではあるがここでは脚部は杯部に付随するものとして考え、杯部主体に分類し、口縁部の形態的特徴からⅠ～Ⅶ類に大別した。

Ⅰ類（79～97）は口縁部が外反し、脚部は筒形を呈するものである。ａ～ｆに細別可能で、ａ－口縁端部が薄くなるもの（79～82）で、器面調整は遺存状態が悪く殆ど不明瞭であるが、杯部についてはヨコナデ後縦ヘラミガキが施されたものが多い。ｂ－口縁端部が丸みを帯びるもの（83～85）、ｃ－端部に面があるもの（86～91）がある。86はヨコナデ後横ヘラミガキが施されるものである。ｄ－口縁部が外反し、杯部の稜が不明瞭なもの(94～95)ｅ－厚手のもの（96）ｆ－杯部が深形のもの（97）で、杯部内面に横ハケメを明瞭に残し杯底部外面はハケメ後横ヘラミガキが施され、胎土は黒褐色を呈し異質である。Ⅰ類の脚部については、筒部は縦ヘラミガキが施され、裾部は横ヘラミガキになるのが主体である。

Ⅱ類（98～121）は、口縁部がほぼ直線的に外開し脚部が筒形を呈するもので、ａ－口縁端部が丸みを帯びるもの(98～108)、ｂ－口縁端部が薄くすっとなるもの（109～115）、ｃ－杯部内面に口縁部と杯部の境界の稜があるもの（116～117）、ｄ－薄手のもの（118～119）、ｅ－厚手でボテッとしているもの（120～121）とに分類した。98･99は杯部の器面調整にヨコナデ後縦ハケメが施されるもので、脚部も縦ハケメが施される。100～121はヨコナデ後縦ヘラミガキの施されるのが多く、僅かに108に横ヘラミガキがみられる。109～118は焼成も良好で器面調整も丁寧であり、特に116は放射状にヘラミガキが施され、暗文風である。120は口径15.0cmの小形品である。

Ⅲ類（122～123）は厚手で杯部が逆三角形を呈し、脚部は筒形と思われるもので、122は遺存状態は良くないがヘラミガキ痕がみられる。

Ⅳ類（124）は、口縁部が直線的に外開し深形で、口縁端部にきて内弯する形を呈し、脚部は筒形である。内外面はヨコナデ後細かい縦ヘラミガキが丁寧に施されるものである。

Ⅴ類（125）はＢ区出土のもので、口縁部が直線的に外開し、杯部は中形で深く、脚部裾内面に一部横ハケメがみられる。

127～159の脚部形態はⅠ～Ⅴ類に付随するものとし、筒形の脚部はここに一括掲載した。筒部の形態からａ～ｇに細分し、ａ－筒部が直線的で裾部がめくれ上り気味になるもの（126～128･132）、ｂ－筒部と裾部の境界の広が

りが8cm前後のもの（129～131・133～140・158）、c－筒部が5～6cmと短く、それに比して裾部の広がりが14cm前後と長いもの（141～142）、d－筒部の長さに比して裾部の広がりが短いもの（143～144）、e－筒部と裾部の境界がなだらかなもの（145～147・159）、f－筒部がふくらみを持って胴張形を呈するもの（148～156）、g－厚手のもの（157）とがある。筒形脚部についての製作技法は、粘土紐の巻き上げが主体をなしているが、いっきに筒部を構成するのではなく、粘土紐を2本使って2段階に成形するものもある。外面の調整は筒部は縦ヘラミガキ、裾部は横ヘラミガキが施されるが、154・155・156・158のように縦ハケメ後ヘラミガキが施されるものや、159は外面はハケメのみで終っているものもある。内面については裾部はヨコナデが主体であるが、筒部には粘土紐痕が顕著に残っているもの、途中までヨコナデが施されるもの、指頭によるナデつけがなされたもの等がある。また、杯部との接続は粘土のホゾを使用している。

［筒形脚部破片456個体（内訳：a・b－115個体、c・d－17個体、f－33個体、穿孔の脚部21個体、破片重量1.35kg÷50g＝270個体分）穿孔のある脚部について、2孔のものが2個体に対して、1孔のものが19個体を数え、本址においては圧倒的で、うち10個体は小形の筒形脚部、5個は筒形脚部のfの形態を示すものである。］

160～163はⅠ～Ⅴ類に付随しないと考え、別に記す。160は柱状に粘土塊を作り、塊の中央に棒状工具で突いて穴を穿ち裾部をつけたものである。裾部内面はヨコナデが施され、外面は筒部で縦ヘラミガキ、裾部で横ヘラミガキされる。161は筒部が裾部との境界に至るまで柱状を呈するもので縦ヘラミガキが施される。162・163はやや小形で、1孔が穿たれ、内面はヨコナデ、外面は縦ヘラミガキが施される。いずれも前出的様相を呈する。

Ⅵ～Ⅷ類は脚部が裾広がりを呈するものである。

Ⅵ類（164～179）は口縁部が直線的に外開あるいは外反し、杯部に段が認められ、大形でどっしりとした感じを呈するもので、脚部は裾が大きく開く形をとる。164は焼成良好、遺存状態も良く完形品である。杯部は内外面ともに縦ヘラミガキが施され、杯底部には放射状にヘラミガキがされ、脚部外面は縦ヘラミガキ、内面は途中までヨコナデされ、頸部は絞ってホゾがなでつけてある。176や178のように脚部内面に横ハケメが顕著に施されているものもある。［脚部破片　約40個体］

Ⅶ類（180）はこれ1個体のみの出土で杯底部に穿孔があり大形器台かとも思われるが、ホゾの刹落した高杯かもしれない。焼成は良好で厚手にて重量感があり、口径24.0cm、杯部高6.5cmを計るが、脚部は残存状態から故意に打ち砕かれたものと考えられる。

Ⅷ類（181～225）は、a－口縁部が直線的に外開またはやや内弯し、脚部の裾広がりがⅥ類のそれより小さいもの（181～183）、b－口縁部が内弯するもの（184～189）、c－口縁部が内弯し、口縁端部にて短く外反するもの（190～198）、d－口縁部が直線的あるいは外反し、小形のもの（199～206）とに細分した。182は遺存状態はあまり良くないが、杯部はヘラミガキが僅かに散見出来、脚部は縦ヘラミガキが施され裾端部で横ヘラミガキになる。182・184・185・197は杯部内面に黒色処理が施されている。189は縦ハケメが施され、188・190・191・193・194は内外面ともにヨコナデ後横ヘラミガキが施され、191・195は杯底部のみ縦ヘラミガキが施される。198はcに入れたが、脚部に外面から粘土を張り付け補強あるいは修理したと思われるような脚部形態を呈しているのが特異である。200は焼成は良くなく、白褐色を呈し胎土に小石粒を多量に含み軽量で、杯部内外面に僅かに縦ヘラミガキがみられる。201の杯部は浅形で杯部外面はヨコナデ、内面ヨコナデ後放射状のナデが施され、また脚部外面はヨコナデがなされている。199～203にはヘラミガキ技法はみられない。206は焼成、整形が悪く、胎土に小石粒等多量に含み、器面はボツボツで赤褐色や白色を呈し、異質である。

脚部形態についてみると、a－脚部高は6～7cm、裾径が11～12cmで反り返るような裾広がりを呈するもの（216～221）、c－大きさはbと同様でふくらみながら裾広がりになるもの（210・222～225）とがある。外面の調整

は縦ヘラミガキと、裾端部で横ヘラミガキが施されるのを主体とし、222は外面横ハケメが施されるものである。［脚部破片　約60個体］

器台〔図41　226〕

口径7.2cmを計る小形器台で脚裾部は欠損している。端部が内弯する皿状中空の受部と4孔の穿孔がある脚部をもつ。器面は荒れているが、受部内面に僅かにヘラミガキがみられる。

小形丸底土器〔図41・42　227～345・356〕

形態的特徴からⅠ～Ⅱ類に大別した。

Ⅰ類（227～230・356）は体部が浅いことから判別できるが、口径が体径より大きく、口縁部の高さが体部の高さより長く頸部のくびれが著しくないものとした。356は内外面に赤色塗彩が施されており、大町市借間49号住に類例をみるが、本址においては1点のみの出土である。Ⅰ類の出土量はⅡ類に比して少なく、復元できたものは4点で、破片にしてもごく僅かである。230は焼成良好で、内外面ともにヨコナデが施されるものであるが、228と229の底部にはハケメが僅かにみられる。［破片　1個体］

Ⅱ類（231～342）は壺形を呈するものであり、a～dに細別した。a－壺というより甕に近い形を呈し、口径が体径より短いかあるいはほぼ同径で、口縁部の高さが体部の高さより短いもの（231～263）で、口縁部が直線的に外開するものと外反するものとある。体部は球形が主体である。ハケメによる器面調整が主で、体部内面には粘土紐痕のあるものもある。250は口縁部内外面、体部外面にヘラミガキが施される。b－体部が扁平球で体部の最大径が下方にあり、底部にどっしりくるもので、口縁部は緩く外開するものとくの字に外反するものとがある（264～273）。遺存状態は悪いが、ハケメが主体である。c－体部が扁平球で最大径が体部中央にあり、口縁部がくの字に外反し、口径が体径より短いもの（274）、内弯気味で口縁部外面に稜線をもつもの（275・277）、口縁部が内弯し、口径が体径より長いもの（278～290）とある。275はB区出土でこの形態はこれ1点のみで、頸部には縦方向にハケメがみられる。d－体部はさらに扁平になり、最大径が体部下方にあり、口縁部は長めで内弯する（291～311）。297・300は頸部から体部中央にかけ縦方向のハケメが施され、暗文風である。b～dは頸部が著しくくびれる形態を呈するものである。

312～342はⅡ類に比定される体部であるが、312～324はbに、325～331はaに、332～342はcに分類可能かと考えられるが、一概にいえないところがあるので一括掲載した。

343は口縁部が非常に短く粗雑な成形で、また344は頸部のくびれが緩く、ナデ調整してあるものの、2個体ともにaに分類するには困難であるので別途にした。

345は法量的にはCの形態に近似するが、焼成が堅緻で底部は平底を呈し凹面を作り出している点異質である。［破片　重量26.2kg÷40g＝655個体分］

直口壺〔図42・43　346～355〕

口径は体径より短く、また、口縁部は内弯気味に外開し、体高より短い。体部は球形に近いのが主体であるが、346のように扁平球を呈するものもある。焼成は良好であるが、遺存状態悪く調整痕は不明である。347は体部内面に粗雑な横ハケメが施される。349は口縁部外面はヨコナデ後縦ヘラミガキが施され、体部にも僅かにヘラミガキ痕がみられ、また体部内面には指頭痕がある。［破片　重量5.2kg　うち底部破片33個体以上］

鉢形土器〔図43　357～379〕

形態的にⅠ～Ⅴ類に分類した。

Ⅰ類（357･358）器形は甕に近いが、法量、器面調整及び口縁部の形態から本類にした。口縁部が強く外反するもの（357）と緩く外反するもの（358）で体部は球形を呈する。

Ⅱ類（359～361）器形は椀形を呈するもので、口縁部は短く外反し、体部が深く丸底を呈するもの（359・360）と、口縁端部内面に面をもつもの（361）がある。ヘラミガキが施され、360は内面黒色処理される。

Ⅲ類（362～369）は所謂杯形を呈し、口縁部がくの字に短く外反し、丸底で深いもの（362）口縁部が緩く外反し丸底で深いもの（363）、口縁端部が緩く外反し丸底で浅いもの（364～367）口縁端部が緩く外反し平底で浅いもの（368・369）があり、いずれもヘラミガキが施される。

Ⅳ類（370～378）は鉢形を呈するもので、口縁部がやや内弯気味に開き平底で浅く皿形に近いもの（370・371）、口縁部が直線的あるいは内弯気味で平底で深いもの（372～374）、口縁部が内弯素縁で平底に近い形を呈するもの（375～378）があり、376は内面に暗文風のヘラミガキが施され、378は口径が体径より短く内弯し薄手でヘラミガキが施される。

Ⅴ類（379）はこの１点しかも15cm四方位の破片なので口径及び器形等定かではないが、大形の鉢形を呈するものと思われ頸部に縦ハケメが施される。

甑〔図43・44　380～391〕

出土量は少ない。単孔のものと多孔のものと２種あり、単孔のものでも中央に１孔穿つのも（380～388）と底部を形作らないもの（389）とがある。多孔のものは390・391の２個体のみの出土で、391は残存部分は約２分の１で、口径20.4cm、胴部径26.0cm、底径9.6cm、器高2.32cmを計り、把手の部分は剥脱して無い。焼成は良好で内弯する素縁口縁部の内外面には横ハケメが巡らされ、胴部は粗雑に荒い縦ハケメが施される。初期須恵器との関連において韓式系土器の影響が考えられる。

手捏ね土器〔図44　392～411〕

出土したものはすべて図示した。その擬似形態から、a－蓋形（392）、b－甕形（393）、c－壺形（394～396）、d－鉢形（397～404）、e－深鉢形（405）、f－椀形（406・407）、g－台付形（408・409）は底部中央に穿孔があり上部の器形は不明である。h－高杯形（410・411）、とに分類される。393の内面には爪跡がみられる。400・401は縦ハケメが施される。

(2)　須恵器〔図44　412・413〕

出土量は非常に少ない。古墳時代に比定される破片が２片と、他に平安時代以降と思われるものが数片出土した。

412は甕の口縁部片で口径は30cm程になるもので、大きく外反する口縁端部は丸味を帯びその下に一条の突帯が巡らされる。焼成は良好堅緻で、内面に深緑を帯びた釉が破片全体に広がっている。

413は壺あるいは甕の胴下部片と思われる。細かい格子状叩き文様が施され、内面は縦ハケメ調整される。焼成は良好であるが、胎土に僅かに小石粒を含有する。２片共に初期頸恵器の様相を呈しており、本址の編年的位置を知るうえで重要である。

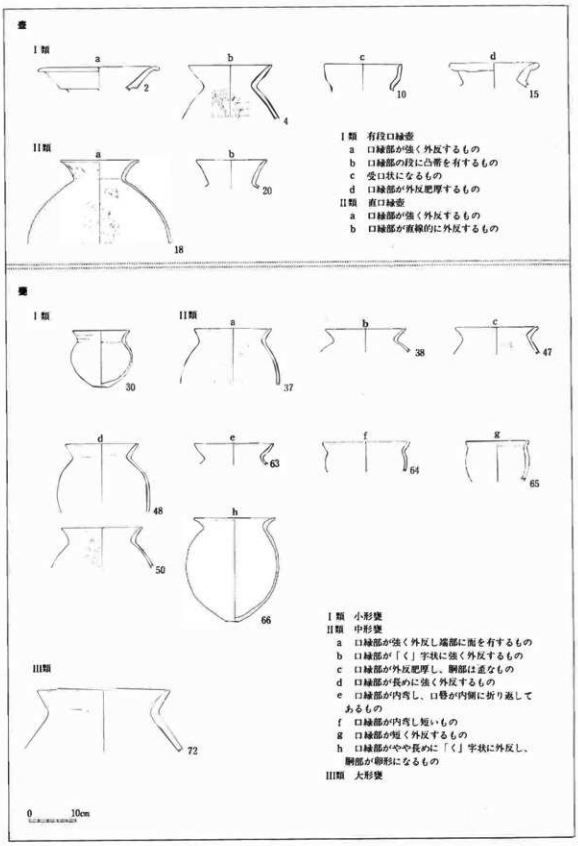


図30　桝下居住域遺構出土土器分類図(1)（Scale= 1 ： 8 ）

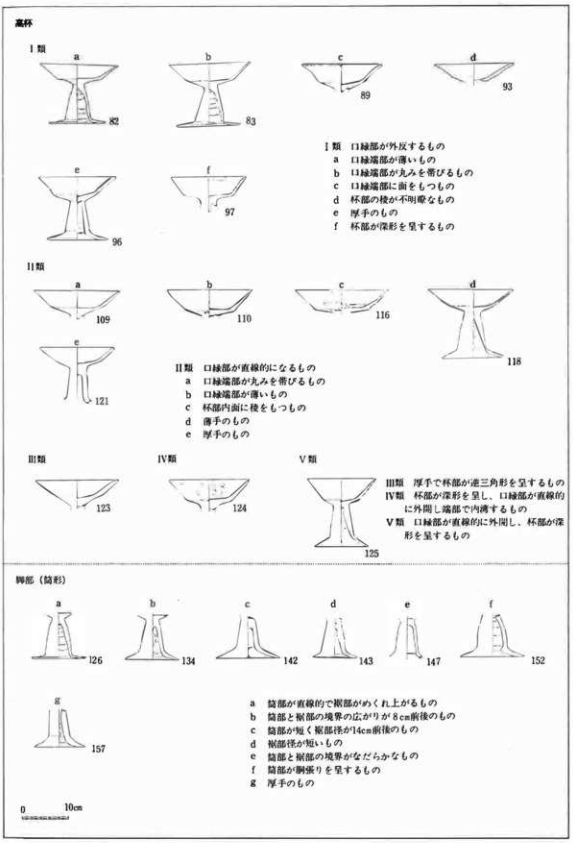


図31　栫下居住域遺構出土土器分類図(2)（Scale＝1：8）

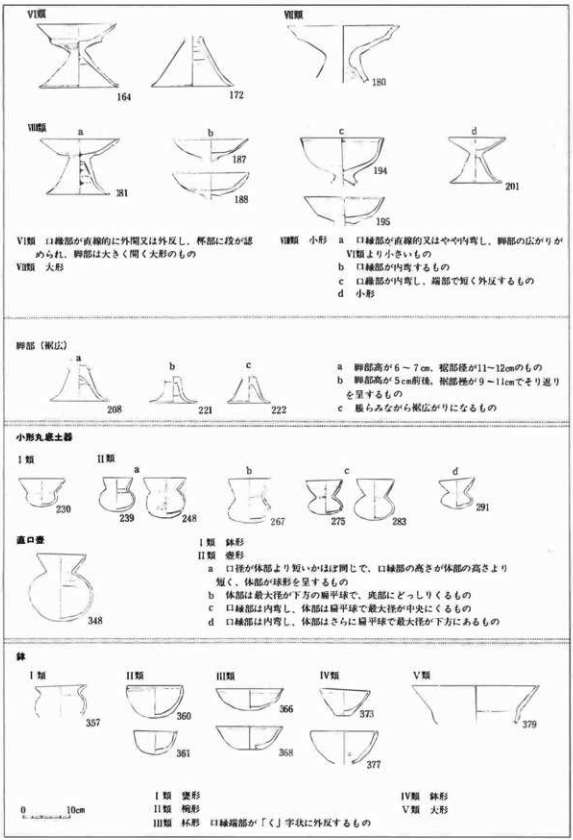


図32　栟下居住域遺構出土土器分類図(3) (Scale＝1：8)

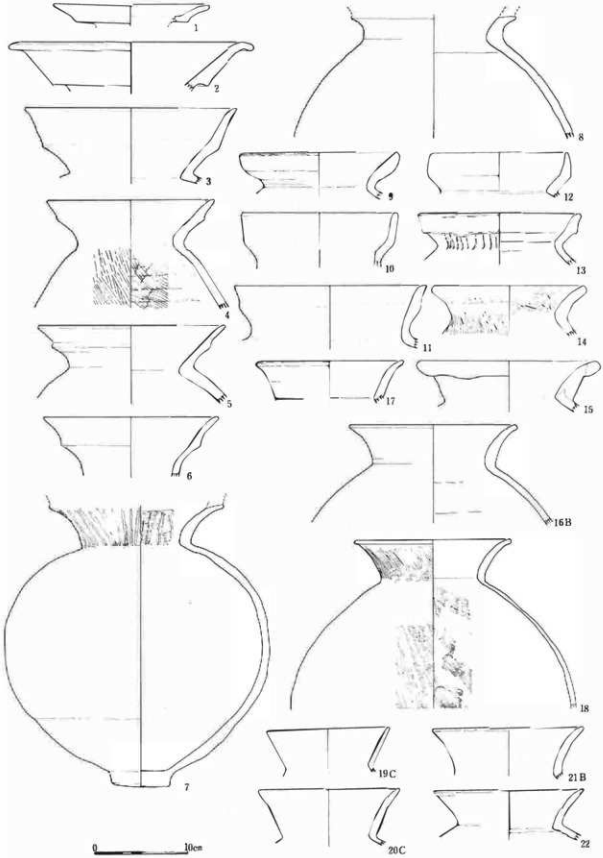


図33　居住域遺構出土土器実測図(1)（Scale＝1：4）

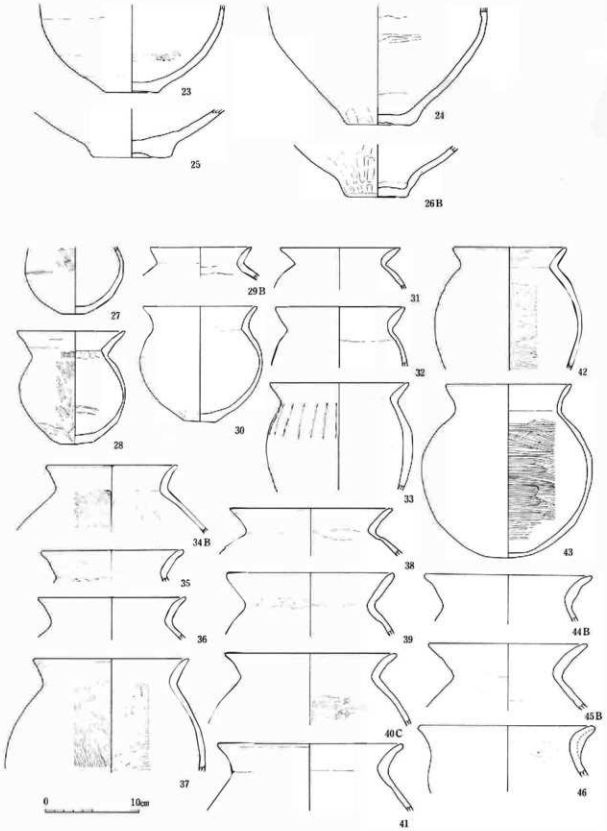


図34　居住域遺構出土土器実測図(2)（Scale= 1 ： 4）

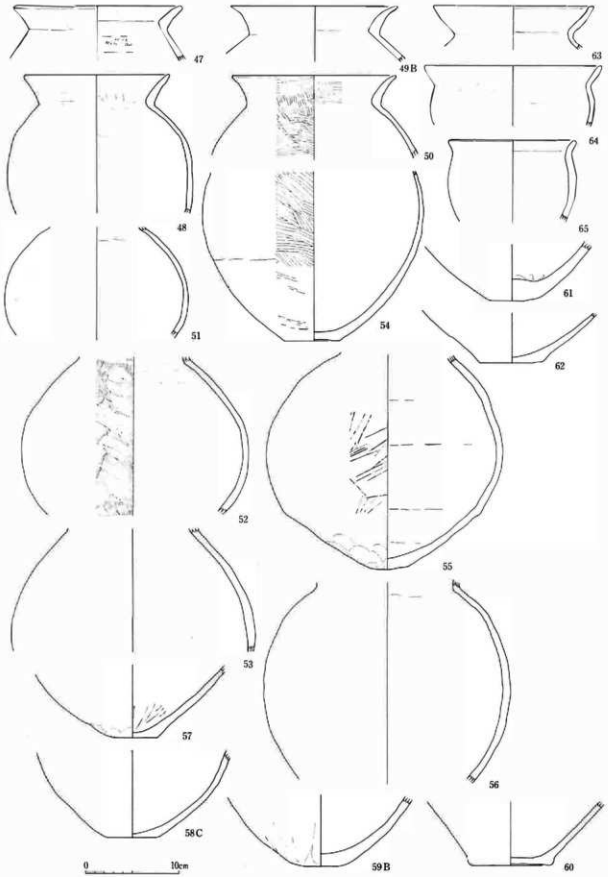


図35　居住域遺構出土土器実測図(3)（Scale＝1：4）

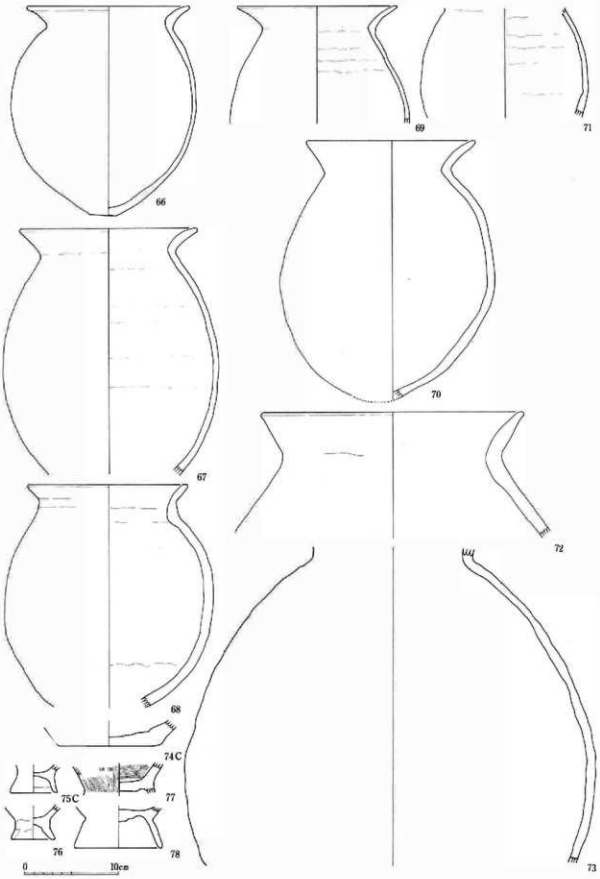


図36　居住域遺構出土土器実測図(4)（Scale＝１：４）

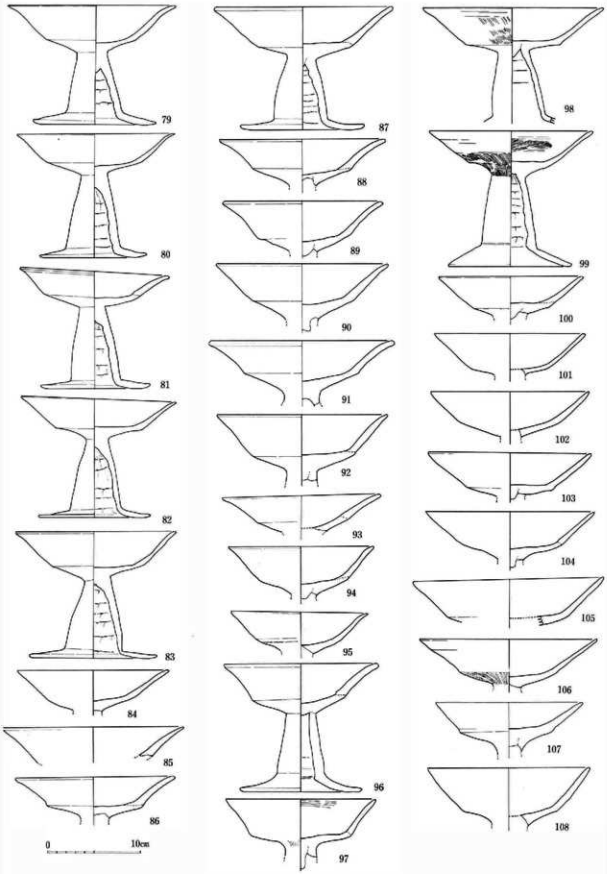


図37　居住域遺構出土土器実測図(5)（Scale＝1：4）

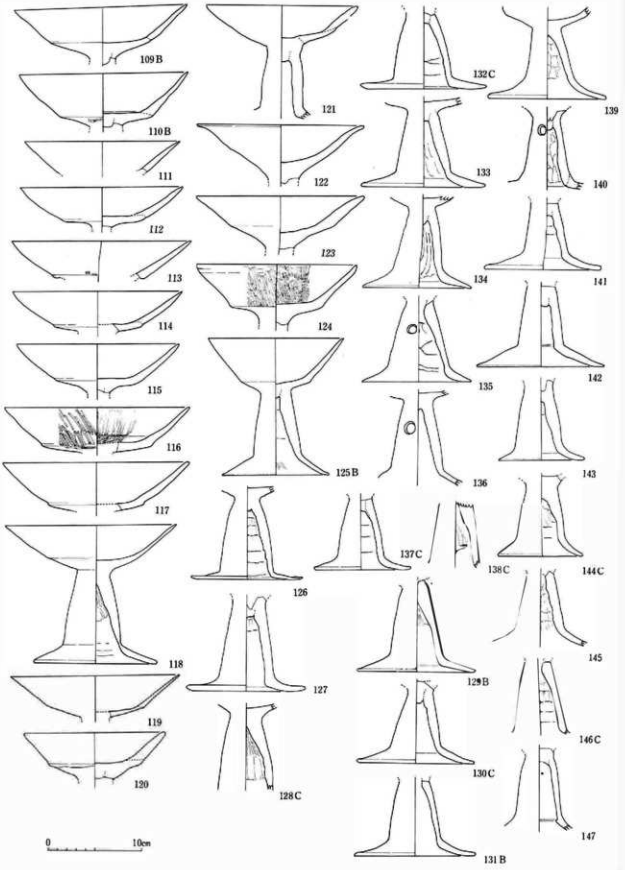


図38　居住域遺構出土土器実測図(6)（Scale＝１：４）

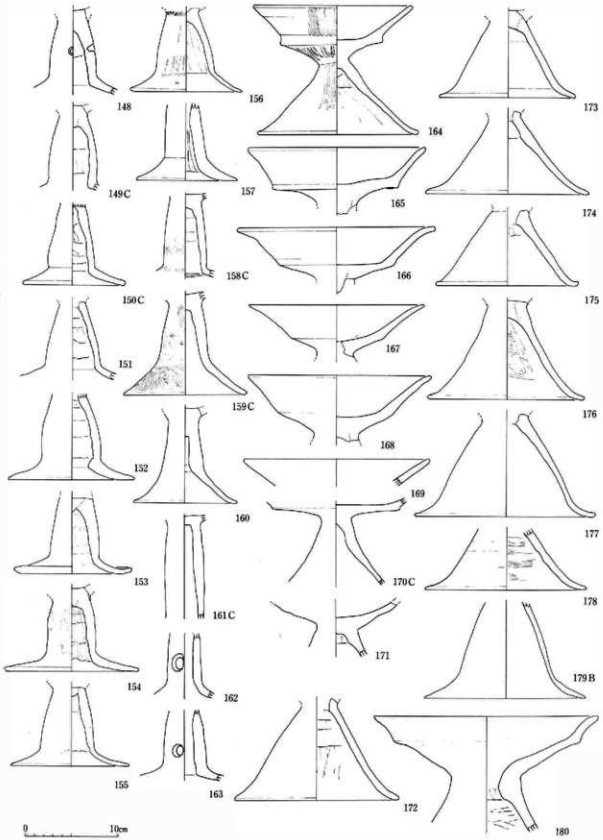


図39　居住域遺構出土土器実測図(7)（Scale＝１：４）

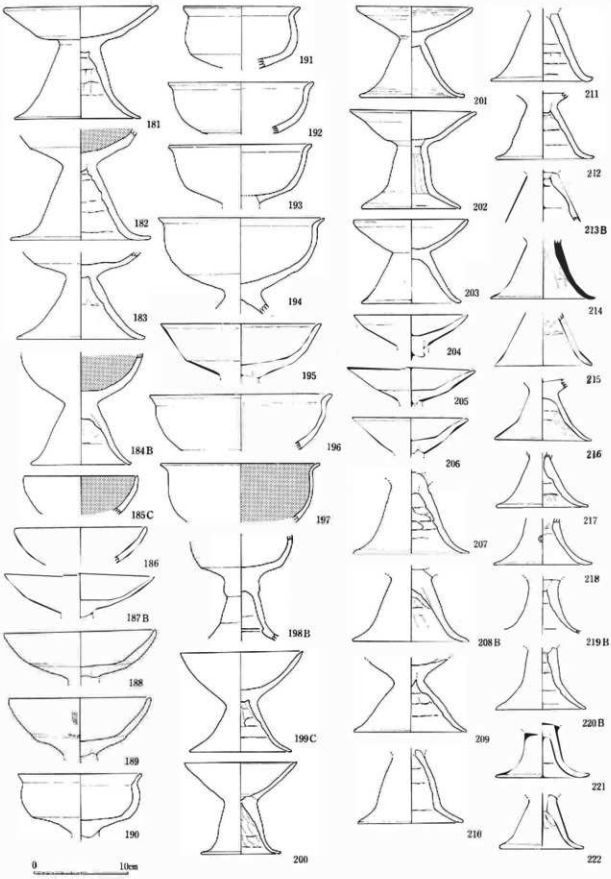


図40　居住域遺構出土土器実測図(8)（Scale＝１：４）

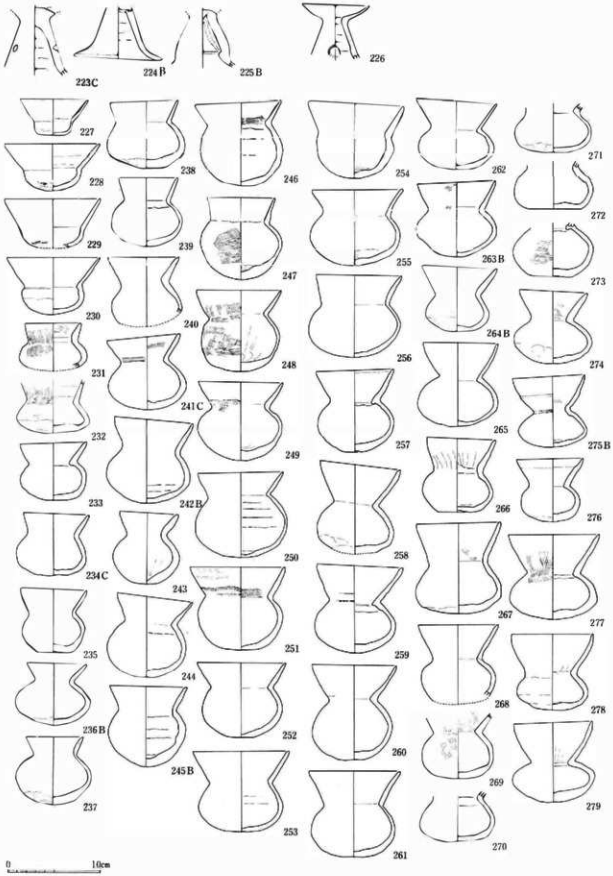


図41　居住域遺構出土土器実測図(9)（Scale＝１：４）

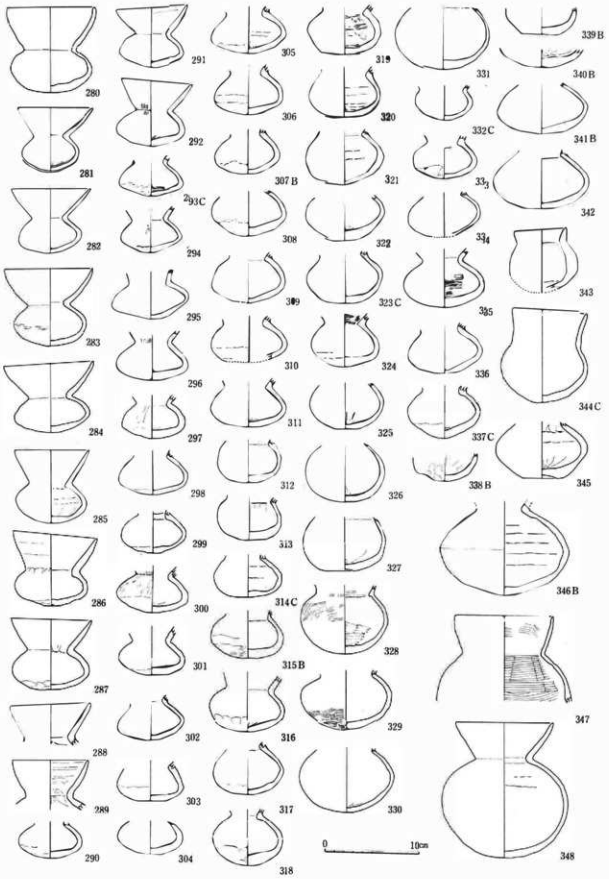


図42　居住域遺構出土土器実測図(10)（Scale＝1：4）

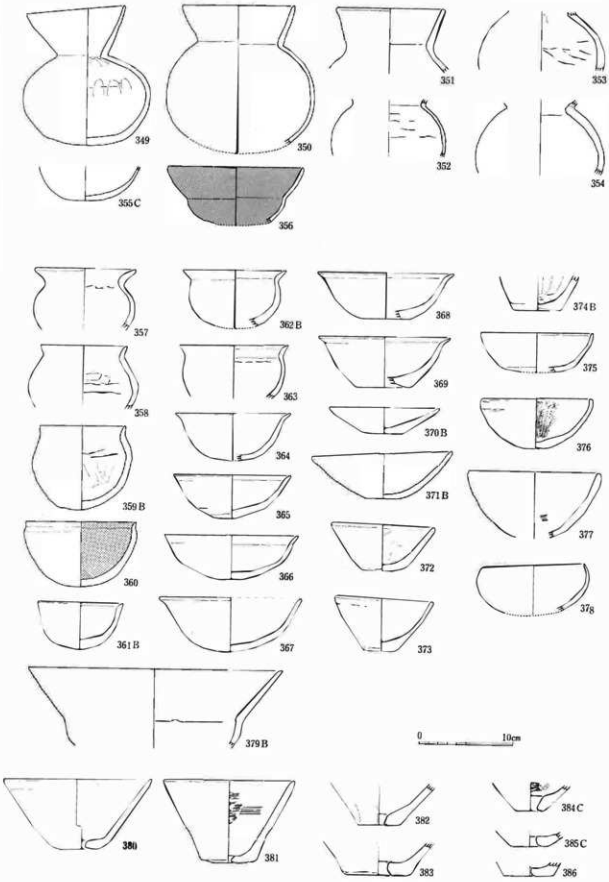


図43　居住域遺構出土土器実測図(11)（Scale＝１：４）

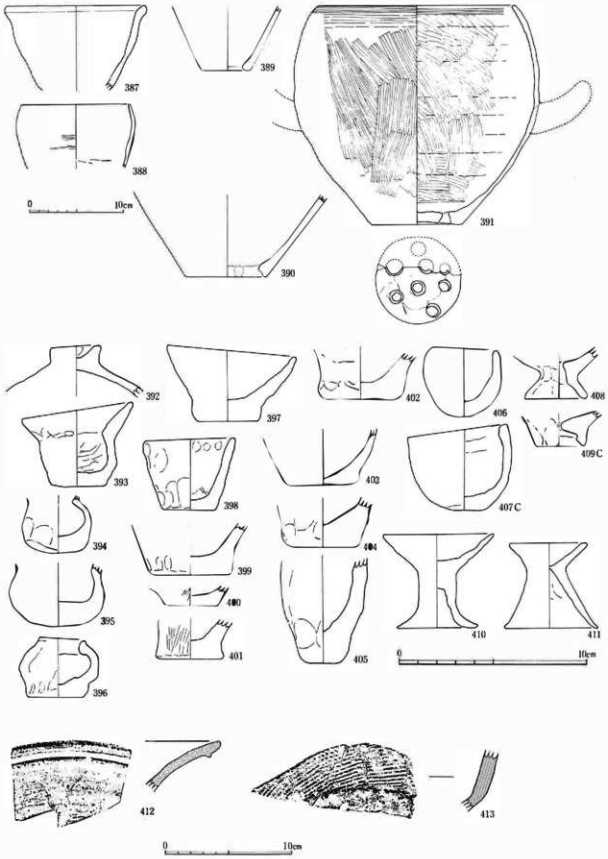


図44　居住域遺構出土土器実測図(2)（Scale＝1：4、392～411は1：2、412・413は1：3）

(3) 土坑出土の土師器

2号土坑〔B区〕〔図45〕

出土量は少なく、いずれも遺存状態は良くない。

甕（1）は口径約18cmを計り、口縁部が短く外反するもので、本址分類のⅡ類に比定される。高杯（2～5）は、2は口縁部がほぼ直線的に外開し、Ⅱ類aに比定出来、脚部は3・4がcに、5は筒部の境界がなだらかでeに比定出来る。小形丸底（6）は復元できたものは1点で、口径9.8cm、頸部径8.5cm、体径10.4cm、器高8.3cmを計り、形態的にはⅡ類aに分類できるが、古い様相を呈するものである。7は小形器台の脚部片で杯底部中央に穿孔があり、脚部には3ケの穿孔がうがたれ、内外面共に縦ハケメが施される。

3号土坑〔B区〕〔図45〕

出土量は少ないが、完形の小形丸底坩が出土し特筆できる。

高杯（1～5）　1は直線的に外開する口縁部を呈しⅡ類bに、2はやや厚手でⅡ類aに比定出来る。いずれも縦ハケメ後ヘラミガキが施される。3は筒形のb、4は筒形のd、5は裾広がりのbに比定できる。

小形丸底（6）　ほぼ完形品で、口径8.4cm頸部径6.8cm、体径8.9cm、器高8.3cmを計り、Ⅱ類aに比定出来る。

直口壺（7～9）　3個体ともに完形品で出土した。7は体径に比して口径が短く、口縁部及び体部内面にハケメがみられるが、整形はやや粗雑である。8は口縁部が薄手で大きく開き著しくくびれる頸部と扁平球の体部を呈するものである。9は胎土に小石粒を多量に含有し、内弯する口縁部と球形の体部をもつものである。

手捏ね土器（10）　1点出土し無頸壺を呈するものでcに分類されよう。

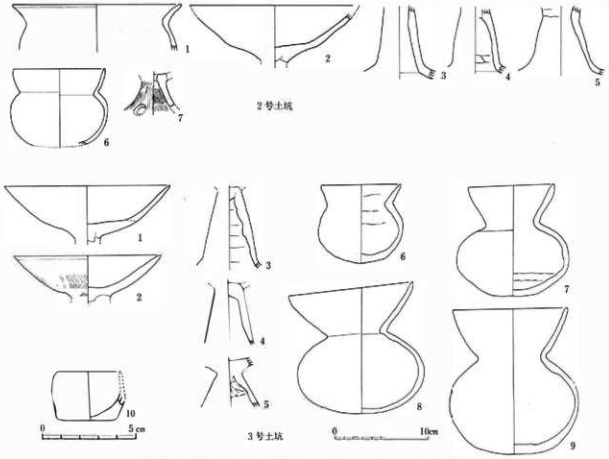
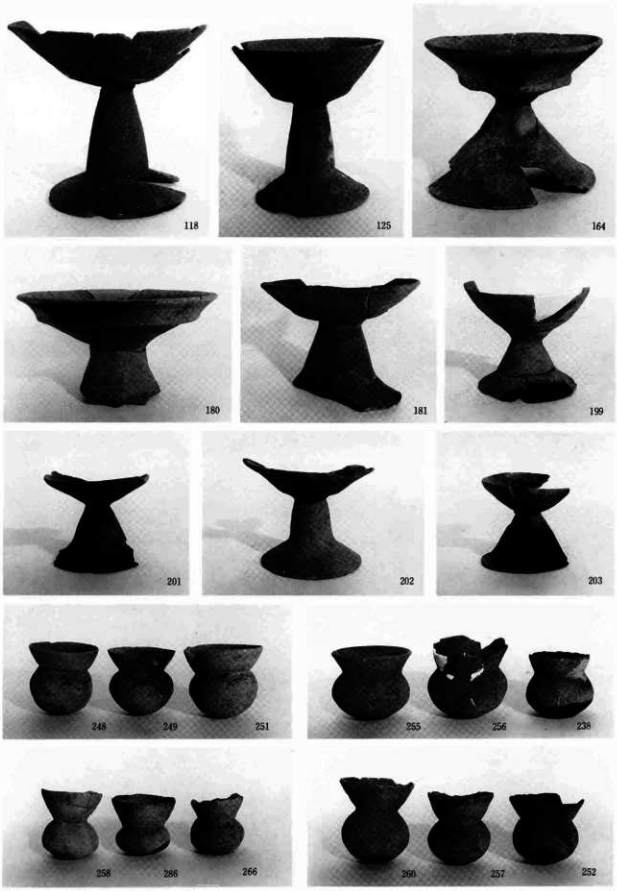
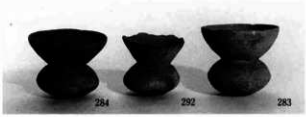


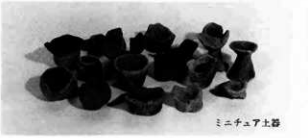
図45　土坑出土土師器実測図（Scale＝1：4、10のみ1：2）

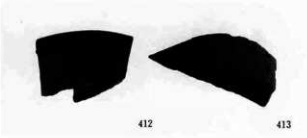
居住域遺構出土土器(1)


118
125
164
180
181
199
201
202
203
248
249
251
255
256
238
258
286
266
260
257
252

居住域遺構出土土器(2)







居住域遺構出土土器(3)

3号土坑出土土師器

(4) 石製品〔図46〕

出土量は少なく、すべて図示した。

石釧〔1〕

約4分の3を欠損しているが、現存部位より環体幅1.0cm、下底幅0.8cm、環体高1.9cmを測り、復元により外径7.8cm、内径5.8cmの推定値を測る。刻みは斜面のみで、側面の無文帯との境界には横に1条の沈線が入っている。型式的には蒲原分類のⅡa型式、刻みの断面形態a_2に当てはまるものと思われる(蒲原1987)。上端部はやや磨耗しているが、全体に丁寧に研磨されている。緑色凝灰岩製。

勾玉〔2～4〕

いずれも滑石製で、3個とも両側から穿孔されている。4は扁平勾玉である。

管玉〔5〕

破片のみであるが、2孔穿たれている。濃い緑色の凝灰岩製である。

石製品〔6〕

用途不明の石製品破片である。破損面以外は細かい多数の擦痕が認められ、全体に研磨してある。石質は滑石系で非常に脆く細片剥離し、爪でも傷がつく。

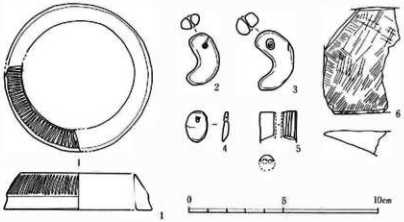
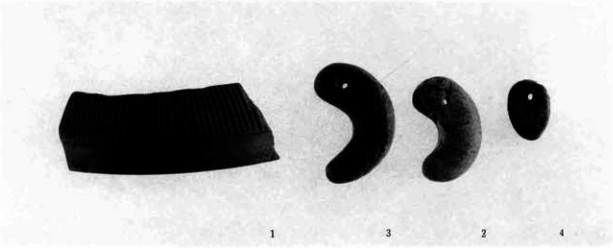


図46 居住域遺構出土石製品実測図 (Scale=1：2)



居住域遺構出土石製品 (Scale≒1：1)

(5) 石　　器〔図47～48〕

殆どがA区からの出土である。出土量は敲打器が圧倒的に多く破片も含めて74個、砥石は大小合わせて11個、凹石6個、乳棒状小形磨石2個、さらに石器といえるかどうか扁平丸石が20個出土した。うち古墳時代に共伴するか否かは定かではないものもあるが、敲打器については代表的な形状のものを、他の石器については可能なかぎり図示することとした。

敲打器〔1～15〕

ここに図示したものは形状の良い方であり、全体的に握り易く、また材質は硬いもの・重いものを選び、自然石の両端を利用・使用したものと思われる。1は断面が扁平で小判形を呈する。2～4は断面が扁平で小形のもの、5～7は断面は扁平から楕円に近くなり、小形で乳棒状を呈する。8～14は断面は楕円が主体で大形になる。15は断面が長方形で四隅に擦痕が認められる。

砥石〔16～24〕

16は研磨痕は一面で、一部に荒い数状の擦痕がある。17は頁岩製で全体に研磨されている。18は砂岩製、乳白色で全面研磨されるが、使用痕著しいのは一面である。19は所謂砥石の概念としては捉えられにくいが、二面に数状の条痕が認められるものである。20は砂岩製で全面によく研磨されきめ細かい。21はほぼ全面に研磨されているが一面に斜めの擦痕がみられる。22は研磨痕は一面で一部に荒い擦痕が認められる。23は両面に使用痕が認められる。24は頁岩製で非常にきめ細かく硬質の重量感があるもので両面に擦痕と叩き痕が認められる。

打製石器〔25～26〕

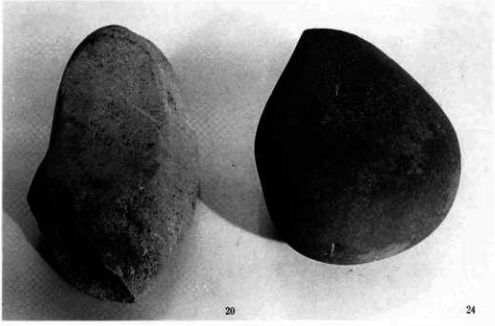
25は両端が石斧状に調整されており、やや磨耗している。26は砥石破片の再利用のようで、調整痕が認められる。

磨石〔27〕

小形で乳棒状を呈し、他に同類のものが一点出土している。

凹石〔28～30〕

いずれも片面に凹みが認められる。30は両端に叩き痕がみられる。



砥　石

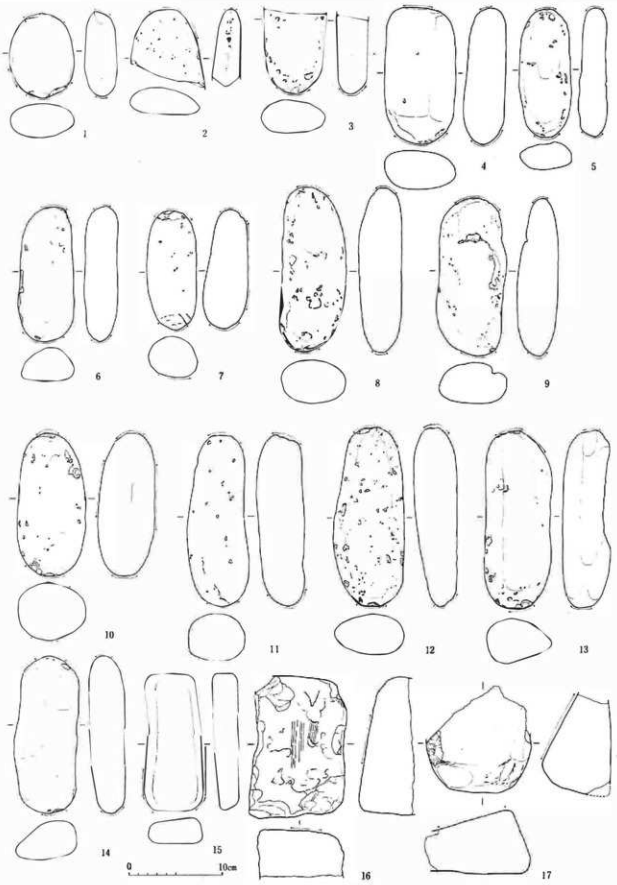


図47　居住域遺構出土石製品実測図(1)（Scale= 1 : 4）

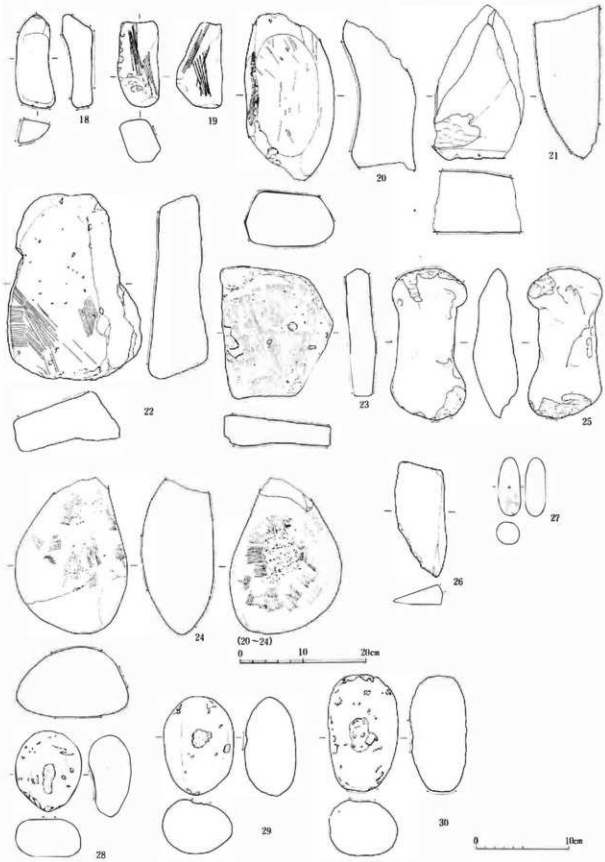


図48 居住域遺構出土石製品実測図(2) (Scale＝1：4、20～24は1：6)

(6) 弥生時代の遺物〔図49〕

出土量は少なく、復元できたものは可能な限り図示した。

壺〔1～3〕

1は焼成は良好で、口縁部から胴下半部まで粗雑に波状文が施文され、以下底部までは縦ヘラミガキされ、内面は横ヘラミガキが施される。2は縦ハケ後波状文が施文され、内面は横ヘラミガキが施される。3は6トレンチからの出土で完形品ではあるが、遺存状態悪く器壁面はザラザラで、波状文を施文後頸部に廉状文を施文してある。いずれも箱清水式に比定される。

高杯〔4～7〕

4は口縁端部と脚部を欠くが内外面共に赤色塗彩される。5も赤色塗彩されるもので脚部を欠く。6は杯部を欠くが、杯部内外面と脚部の外面に赤色塗彩が施され、三角窓が3ヶ所穿孔され、ヘラミガキが施される。裾部内面に横ハケがなされる。7は杯部内外面、脚部外面に赤色塗彩されるが遺存状態は悪く、杯部は薄手である。

浅鉢〔8〕

底部外面を除いて赤色塗彩され、内外面横ヘラミガキが施される。

磨製石包丁〔9〕

C区石列出土で安山岩製。穿孔は2個で両側から穿ってある。約6.5cm前後のものと思われる。

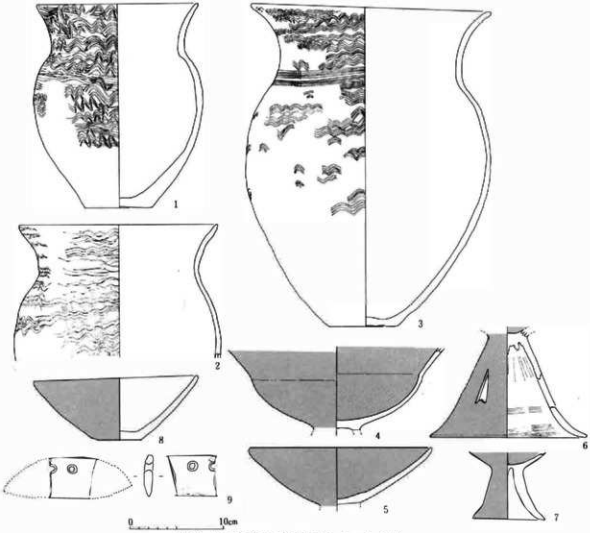


図49 弥生時代遺物実測図（Scale＝1：4）

3 小　結

昭和62年度から継続実施してきた石川条里遺跡の調査成果について報告してきた。ここでは特に平成元年度に実施した「栁下居住域遺構」を中心に総括したい。

検出遺構について

拡張区にて検出した微高地は、検出部分で一辺約60mとなる。C区にて検出した微高地の形態から、一辺60m以上の隅丸方形を呈するものと思われ、低地部への落ち込み部分は切削により整地している可能性もある。薬師山より派生する尾根が低地部に変換する自然地形を巧みに利用している。西側は中段・下段と僅かな段差をもち平坦面を形作っている。これより南はトレンチ調査の成果からも明らかに低湿地帯となり、帥長野県埋蔵文化財センターの調査した「大溝」区画遺構とは連続性をもたない。

C区にて検出した集石遺構は居館跡に見られるような貼石ではない。先述したとおり築堤的な施設の可能性が考えられる。微高地西南隅を保護する防護堤とするならば、県埋文センター調査地との間の低湿地部分が千曲川の増水により氾濫原となり、その流水の方向に対して築かれているとも考えられる。

出土遺物について

A区を中心に出土した多量の土器群は、ある一定期間内の連続した一括資料である。時期的には、鉢形の小形丸底土器と小形器台が減少し、壺形の小形丸底土器が盛行する段階、高杯の杯部口縁が直線または外反し、長脚の筒形脚部形態を示すⅠ・Ⅱ類が主体となる段階として、裾内においては寺沢編年の布留4式併行が主体となるが、布留3式併行にまで遡る可能性のある土器も若干見受けられる（寺沢1986）。県内では宇賀神編年Ⅲ期の新しいところあるいは須恵器出現以降の初期段階といえよう(宇賀神1988、1992)。善光寺平においては駒沢新町遺跡1号祭祀遺構出土資料に併行すると思われる。A区で共伴する須恵器2片は、甕の口縁部形態や甕（あるいは大形鉢？)胴部破片の格子状叩き技法から、きわめて初期段階の須恵器、和泉陶色編年TK73型式古段階～新段階の範疇に含まれるものと思われる(田辺1981他)。よって栁下居住域遺構出土土器群は、善光寺平において初期須恵器が出現する前後の時期が主体となろう。

県埋文センターのご配意により整理中の高速道調査地出土資料を実見する機会を得たが、鉢形の小形丸底土器

微高地全景（B・C区、南西から）

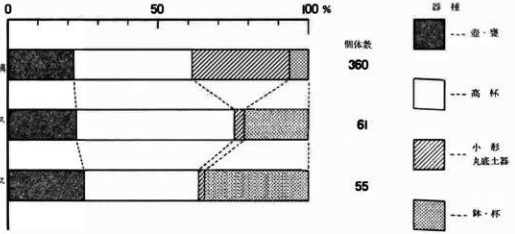


図50　他住居跡出土土器組成との比較（実測図発表分のみの比較）

が多い等、当遺構出土資料に若干先行する様相が看取された。未だ整理途上のため詳細な報告はされておらず明言できないが、当遺構との関連においてもその成果が待たれる。

土器出土状況はA区を中心として落ち込み面一面に密集し、約40cm前後の厚い包含層の中でも大きく3層に分層できることは既述した。土器の投棄を伴う祭祀的な出土状況というよりは、居住域における一定期間内の連続する廃棄を想定できる。

土器出土総量は、前章における破片からの推定値を基に約2,000個体と推算した。もっともこれは目安にしかならない。

器種構成比率として高杯が約3割5分、小形丸底土器が約3割を占めその数が多い。また壺と甕について合わせて約2割と多いことも見逃せない。図50に挙げた比較図は、実測図に掲載されている資料のみの、また時期的にも若干後出段階の住居跡出土資料であり、曖昧な条件下での比較となるが一応の目安として考えたい。もちろん壺・甕類が5割程度を占める住居跡も多いが、浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスB地点3・14号住居跡等は、壺甕類が3割に満たない（長野市教委1986）。高杯・小形丸底土器の多量出土をもって祭祀的遺構を考えることも可能ではあるが、当調査区と同様な組成を有する居住形態を示す遺構が存在することを否定できない以上、祭祀と即断することはできまい。むしろ該期の土器が内包する器種組成の特質として把握することも可能であろう。今後資料の蓄積を待ってさらに検証する必要がある。

石製品の中では石鋼の出土に注目したい。形態的には蒲原分類のII－a_2型式となろう（蒲原1987）。石鋼の性格上形態のみによる考察は多分に危険を孕むが、管見による県内の類例は、須坂市鏡塚1号墳2例（共にII－a型式）・丸子町鳥羽山洞穴遺跡1例（II－a型式）・同町社軍神遺跡（未製品）・更埴市生仁遺跡1例（II－a型式）、そして石川条里遺跡は県埋文センター調査地3個体、当調査区1個体である。古墳出土2例・生産遺跡出土1例・祭祀その他遺跡6例となる。全国的にみても古墳や玉作遺跡以外から出土した例は稀少で、福岡県沖ノ島祭祀遺跡例を除けば長野県のみである。問題となるのは、石川条里遺跡出土の4個体は車輪石や勾玉も含めてその性格とは何かである。集落内溝跡から出土した千曲川対岸に位置する生仁遺跡例も、ほぼ同様な性格と考えたい。現状で確認されるものが古墳・玉作遺跡・祭祀遺跡のみであり、居住形態を示す遺構からの出土例が知られていない以上、祭祀遺跡としての石鋼を考えるのが最も妥当であろう。しかし祭祀的色彩の強い遺物の出土をもって祭祀遺跡とすることには若干の危惧を禁じ得ず、さらに詳細な分析・検討が必要となろう。

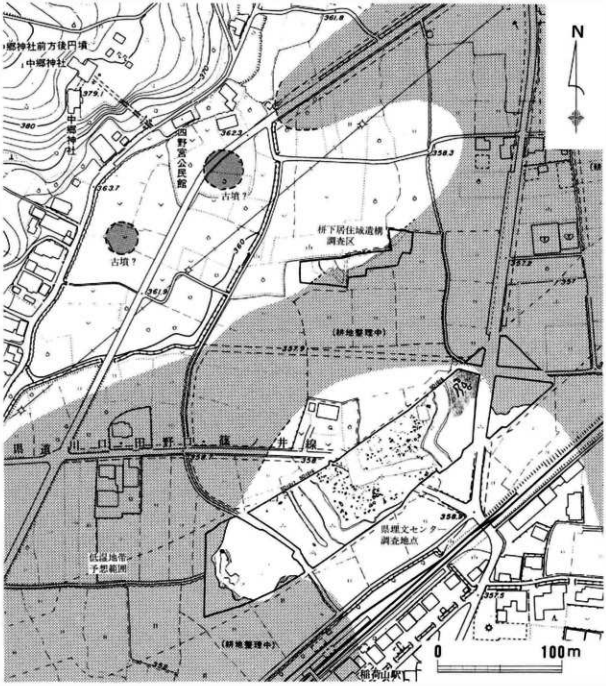


図51　調査区周辺概念図（Scale＝1：3,000）高速道調査地は飯長野県埋蔵文化財センターのご配意による。

周辺古環境の復元

トレンチ調査の成果と標高分布図、プラント・オパール分析結果をもとに2,500分の1の地形図を10,000分の1に縮小した図において微高地・低地等の古環境について推定復元した（図51・52）。堤防完備以前には千曲川氾濫の度に冠水したが、その範囲は常に限られるという話からも、千曲川後背湿地の中で氾濫による冠水の範囲を往時の低湿地帯と考え、水害を免れる微高地に居住域遺構占地の状況を想定することには無理はない（長野市教委1991）。低湿地帯の土地利用過程については、プラント・オパール分析結果から、比較的乾いた土壌条件から千曲川氾濫増水と思われる冠水を経て低湿地帯となり、水田経営へと移行していく状況が推定できる。なお、当調査地の北西方向2ヶ所に古墳状の微高地を認めることができるが、詳細は不明である。

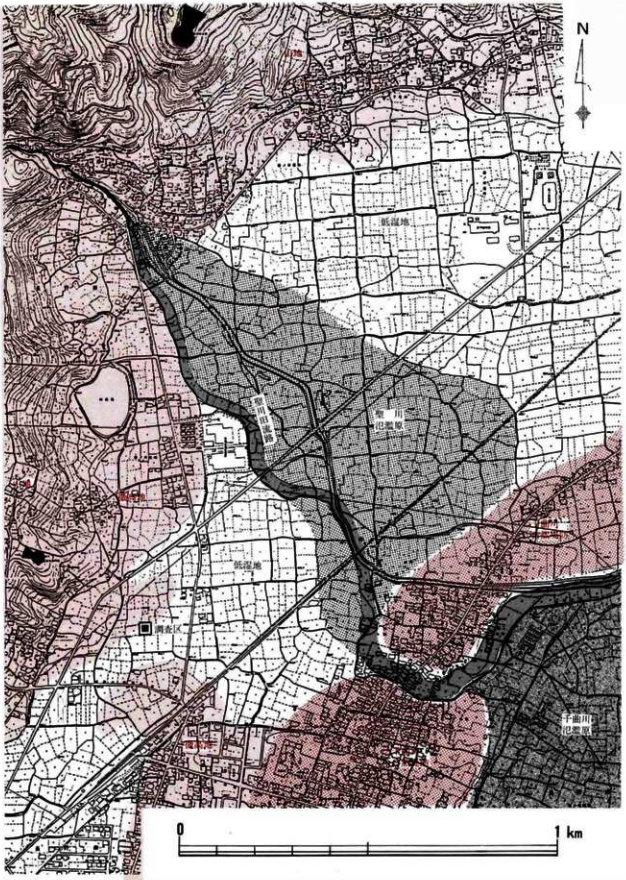


図52　調査区周辺古環境概念図（Scale＝1：10,000）

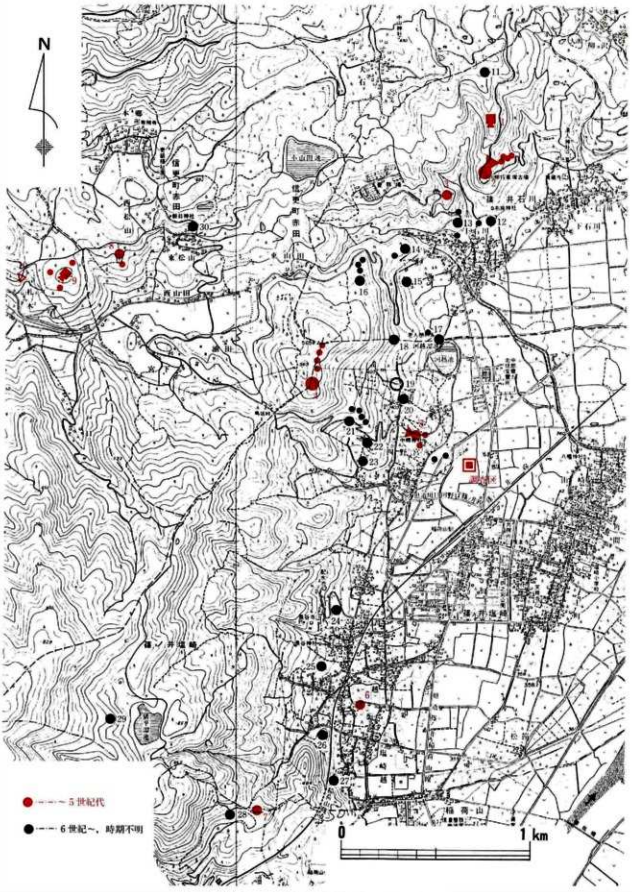


図53　調査区周辺古墳等分布図（Scale＝1：20,000）

調査区周辺古墳等一覧表

番号	名称	立地	墳形	法量(m) 全長	法量(m) 比高	外部施設	内部施設	遺物	備考
1	姫塚古墳	尾根上	前方後方墳	32.0	3.5				国指定史跡
2	川柳将軍塚古墳	尾根端	前方後円墳	93.0	10.0	葺石、段築？ 円筒埴輪列？	竪穴式石室	内行花文鏡等鏡、銅鏃、筒形銅器、刀剣、車輪石等石製品、玉類、埴輪円筒棺等	国指定史跡
3	飯綱社古墳	山腹	円墳	16.5	1.5		竪穴式石室？	鳳式鏡、直刀、馬具、玉類、土器等	
4	四野宮将軍山古墳	山頂	円墳	32.0	3.7				
5	中郷古墳	尾根端	前方後円墳	53.0	4.5	葺石、段築？	竪穴式石室？		市指定史跡
6	八幡宮古墳	山麓	円墳？	17.0	5.1		竪穴式石室	捩文鏡、鉄剣、玉類等	
7	越将軍塚古墳	山腹	円墳	33.0	6.7	葺石、周溝、段築	竪穴式石室	鉄片、玉類、埴輪、土師器等（鏡？）	市指定史跡
8	赤田大塚古墳	丘陵上	円墳	32.0	7.2	葺石			
9	田野口大塚古墳	丘陵頂	前方後方墳	38.0	4.0	段築	竪穴式石室？		市指定史跡
10	（佐ノ山第群）	丘陵中					竪穴式石室 粘土槨内	鍛化鉛飾威頭恵器（TK47型式併行）	
11	勝ノ入1号墳	山頂	円墳	15.1	2.5				
12	宮下1号墳	山腹	円墳	5.5	1.8				
13	大田和1号墳	山腹	円墳	7.0	1.0				
14	城古墳	尾根端	円墳	7.0	2.3		横穴式石室		
15	遺空平2号墳	山麓	円墳	14.0	5.0		横穴式石室		
16	殿板3号墳	尾根上	円墳	11.3	3.4		横穴式石室		
17	丸山4号墳	山麓	円墳				横穴式石室	大刀、鉄鏃、金環、馬具、釘、須恵器等	市指定史跡
18	池の上古墳	山腹	円墳	15.0	3.0	土石混合	横穴式石室		市指定史跡
19	八ッ塚古墳？	尾根端	円墳？	20？				地元古老の話による	
20	八ッ塚1号墳	山麓	円墳				横穴式石室	直刀、金環、玉類、須恵器等	
21	大仙寺古墳	山腹	円墳	11.0	2.5		横穴式石室		
22	小日向古墳	山腹	円墳	5.6	10.0	積石塚？	横穴式石室？		
23	秋葉山古墳	山腹	円墳	7.0	1.9		横穴式石室		
24	鶴巻古墳	山麓	円墳	15.5	2.3	土石混合	横穴式石室		市指定史跡
25	長谷平古墳	山麓	円墳	15.5	2.7		横穴式石室		
26	城山古墳	尾根端	円墳	13.6	2.9		横穴式石室		
27	東谷古墳	山麓	円墳	7.0	2.4			直刀、金環等	
28	塚穴古墳	山腹	円墳	13.5	4.5		横穴式石室		
29	薬山古墳	山腹	円墳	6.0			横穴式石室		
30	台山塚古墳	丘陵上	円墳				横穴式石室	玉類等 直刀、須恵器等	

拝下「居住域」遺構の性格

当調査区にて検出した方形状の徴高地や集石遺構、それに伴い出土した多量の土器群・石製品などは何を示しているのであろうか。多量の高杯・小形丸底土器、石鋤・勾玉・木製品等の出土など祭祀との関連を示す要素はある。県埋文センターの高速道調査地では「大溝」区画遺構、鳥形木製品や石鋤等石製品の出土、土器出土状況等によって祭祀場の可能性を提起している。また「大溝」区画遺構や当調査区での掘立柱建物跡等により、近年検出例の増えている豪族居館跡の可能性も指摘されている（三上他1989）。

ここで古墳時代前期から中期にかけて検出される土坑・河道・溝・落ち込み等や、それに伴う土器や祭祀的色彩の強い遺物を出土する遺跡について触れたい。奈良県布留遺跡は、「布留式土器」の標式遺跡とされながらもその実態については明確にされていない。「布留溝」より出土した刀剣装具等の多量の木製品は、その出土状況や残存状況から祭祀に伴うものとされている。また大型掘立柱建物跡や貼石遺構等は豪族居館跡と考えられている（置田1991他）。纒向遺跡（群）は、河道や「纒向大溝」、導水遺構等が検出されている。居住施設としては竪穴住居跡が1軒知られているにすぎず、小規模な掘立柱建物跡と思われるピットが多い。遺物は搬入された土器を始めとして祭祀的色彩の強い弧文円板や特殊埴輪等が出土している。この地域は、複数の河道と箸中・太田等の徴高地および纒向石塚等の古墳が有機的に結びつき、軍事的・都営的・市的機能を内包する一大集落となる可能性が指摘されている（石野他1976、寺沢1984他）。最古の庭状特異遺構として話題になった三重県上野市城之越遺跡は、石貼溝遺構や井泉が検出された。溝埋土下層からは4世紀後半代の布留式土器群（高杯・小形丸底壺が多いという）や剣形等の木製品が出土し、祭場と初源的な庭の両性格を持った性格を想定されている（倉田1991他）。この他愛媛県出作遺跡等関連する遺跡は少なくないが、これらの遺跡とは状況の相違から単純に比較はできないものの、該期

調査区より
川柳将軍塚古墳を望む

調査区より
四野宮将軍山古墳
中郷古墳を望む

における関連遺構として共に考慮すべき必要がある。

当調査区について、祭祀的な要素を認めながらもその内包する危険性については前述したとおりである。A区を中心とする土器の出土状況や掘立柱建物跡の存在、微高地防護堤たる集石遺構等、「居住域」として積極的に否定されるものではない。石鋼等の祭祀的色彩の強い遺物の出土に関しても、古墳造営に何らかの形でかかわる「居住域」と考えることも不可能ではあるまい。竪穴住居や掘立柱建物とは異なる、検出面にその痕跡を残さない建物等、若干異質な居住形態の在り方を想定することも必要となろう。それゆえ現状では付近において該期の集落が検出されていないことを再考する必要がある。川柳将軍塚古墳を始めとする大形古墳造営にかかわる労働力を、奈辺に求めるべきであろうか。資料的制約が大きいながらも川柳将軍塚古墳について4世紀後半に位置するであろうことは大方の研究者の一致した見解である。4世紀後半から5世紀前半にかけての限られた時間幅にあって、川柳将軍塚古墳あるいは中郷古墳と、若干の時間のずれがあるようだが高速道調査地の「大溝」区画遺構と耕下居住域遺構が存在していることこそ重要な要素ではなかろうか。仮に「大溝」区画遺構を含め当調査区に居館跡あるいは他の特異な居住施設を想定するとすれば、川柳将軍塚古墳・中郷古墳等の前中期古墳との有機的な繋がりを勘案することも可能となる。

多くが仮定の上に立った推測の域を出ないが、遺構・遺物の性格の中に祭祀にかかわる要素が存在することを否定するものではない。「祭祀」とする前に、まずはそれを一部に内包した居住施設としての機能に関して注意を払う必要があることを提起し、このような視点から当調査区のみならず該期の関連遺構についても再考の余地が残されていることを確認したい。

引用・参考文献

青木　和明　1992　「篠ノ井地区の遺跡」『科野における古墳出現期の現状と課題』長野県考古学会平成３年度大会資料

青木　一男　1989　「土器にみる森将軍塚古墳出現の前後」『長野県埋蔵文化財センター紀要３』長野県埋蔵文化財センター

石野　博信他　1976　『纒向』桜井市教育委員会

井堀　五郎　1989　『犀川の自然と文化』犀川の自然と文化を語る会

宇賀神誠司　1988　「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要２』長野県埋蔵文化財センター

宇賀神誠司　1992　「４世紀を中心とした土器編年表」『科野における古墳出現期の現状と課題』長野県考古学会平成３年度大会資料

置田　雅昭　1974　「大和の古式土師器の実態」『古代文化』第26巻第２号　古代学協会

置田　雅昭　1991　「川の神まつり」『古墳時代の研究』第３巻　生活と祭祀　雄山閣出版

蒲原　宏行　1987　「石製研究序説」『比較考古学試論』筑波大学創立十周年記念考古学論集　雄山閣出版

蒲原　宏行他　1979　「善光寺平南部における古墳の実測調査」『信濃』旧第31巻第12号　信濃史学会

倉田　直純　1991　「城之越遺跡の庭状特異遺構」『考古学研究』第38巻第３号　考古学研究会

小林　行雄　1961　『古墳時代の研究』青木書店

下平　秀夫　1968　「川柳将軍塚古墳発見の埴輪円筒棺をめぐって」『信濃』旧第20巻第４号　信濃史学会

関川　尚功　1990　「集落遺跡の実例　纒向遺跡」『古墳時代の研究』第２巻　集落と豪族居館　雄山閣出版

高橋　健自　1913　「銅の研究」『考古学雑誌』第３巻第７号　日本考古学会

高橋　健自　1925　「車輪石・鍬形石及び石釧の研究　附貝器の青銅化」『考古学雑誌』第15巻第６号　日本考古学会

田辺　昭三　1981　『須恵器大成』角川書店

寺沢　薫　1984　「纒向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』第６　吉川弘文館

寺沢　薫　1986　「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

中上　京子　1977　「石製腕飾類出土地とその集成」『河内長野　大師山』関西大学文学部考古学研究第５冊

花岡　弘　1991　「土師器の編年　中部高地」『古墳時代の研究』第６巻　土師器と須恵器　雄山閣出版

穂積　裕昌　1991　「城之越遺跡」『三重県埋文センター通信　みえ』No.5　三重県埋蔵文化財センター

前島　卓　1990　「駒沢新町遺跡出土土師器についてのメモ」『地域文化試論』創刊号　地域文化研究会

三上　徹也他　1989　「石川条里遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報６』長野県埋蔵文化財センター

宮下　健司　1979　「長野県川柳将軍塚古墳をめぐる古文献」『信濃』旧第31巻第９号　信濃史学会

森本　六爾　1929ａ　「更級郡川柳村に於ける円筒棺発掘の予報」『信濃考古学会誌』第１巻第２号　信濃考古学会

森本　六爾　1929ｂ　『川柳村将軍塚の研究』岡書院

米山　一政　1965　「川柳将軍塚出土銅鐸覚書」『長野県考古学会誌』第２号　長野県考古学会

米山　一政　1978　「更埴地方の古墳」『更級埴科地方誌』第２巻　原始古代中世編

更埴市教育委員会　1989　『生仁遺跡III』

長野県史刊行会　1982　『長野県史』考古資料編全１巻(2)　主要遺跡（北・東信）

長野県史刊行会　1988　『長野県史』考古資料編全１巻(4)　遺構・遺物

長野市教育委員会　1986　『浅川扇状地遺跡群　―牛礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点―』長野市の埋蔵文化財第17集

長野市教育委員会　1987　『長野県史跡　土口将軍塚古墳　―重要遺跡確認緊急調査―』長野市の埋蔵文化財第19集

長野市教育委員会　1989ａ　「石川条里遺跡(4)」長野市の埋蔵文化財第34集

長野市教育委員会　1989ｂ　「篠ノ井遺跡群II」長野市の埋蔵文化財第35集

長野市教育委員会　1990　「篠ノ井遺跡群III」長野市の埋蔵文化財第37集

長野市教育委員会　1991　「塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)」長野市の埋蔵文化財第39集

長野市の埋蔵文化財

第１集『信濃長原古墳群』
第２集『浅川西条』
第３集『中村遺跡』
第４集『塩崎遺跡群』
第５集『塩崎遺跡群(2)』
第６集『三輪遺跡―付水内坐―元神社遺跡』
第７集『田中沖遺跡』
第８集『篠ノ井遺跡群』
第９集『四ツ屋遺跡（第１～３次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
第12集『浅川扇状地遺跡群―牟礼バイパスＡ・Ｅ地点遺跡―』
第13集『浅川扇状地遺跡群―廻田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』
第14集『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』
第15集『箱清水遺跡(2)』
第16集『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』
第17集『浅川扇状地遺跡群―牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点―』
第18集『塩崎遺跡群Ⅳ―市道松節―小田井神社地点遺跡―』
第19集『土口将軍塚古墳―重要遺跡確認緊急調査―』
第20集『三輪遺跡(2)』
第21集『芹田小学校遺跡』
第22集『長野吉田高校グランド遺跡』
第23集『横田遺跡群　富士宮遺跡』
第24集『塩崎遺跡群Ⅴ　殿屋敷遺跡』
第25集『南川向遺跡』
第26集『東番場遺跡』
第27集『小柴見城跡』
第28集『宮崎遺跡』
第29集『浅川端遺跡』
第30集『地附山古墳群』
第31集『町川田遺跡』
第32集『中条遺跡』
第33集『鶴前遺跡・塩崎城跡』
第34集『石川条里遺跡(4)』
第35集『篠ノ井遺跡群Ⅱ』
第36集『屋地遺跡Ⅱ』
第37集『篠ノ井遺跡群Ⅲ』
第38集『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
第39集『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』
第40集『松原遺跡』
第41集『小島柳原遺跡群中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡・檜田遺跡』
第42集『田中沖遺跡(2)』
第43集『南宮遺跡』
第44集『塩崎遺跡群(7)』

長野市の埋蔵文化財第45集

石川条里遺跡(6)

平成４年３月10日　印刷
平成４年３月14日　発行

編　集　長野市教育委員会
発　行　長野市埋蔵文化財センター

印　刷　ほおずき書籍株式会社